情報ボックス

今回は、ある児童生徒像を基に、本校の指導で取り入れている教材をご紹介します。

自己刺激が多い児童生徒像

発達が初期段階にある児童生徒には、「手を口に入れる」「頭や体を揺らし続けている」といった「常同行動（＝目的もなく同じ動きを繰り返す行動のこと）」がみられることがあります。自分の常同行動が刺激となって、それを自分で受けることから、この一連の行動を「自己刺激（行動）」と呼びます。自己刺激が起こる原因は様々あり、「興味や関心の狭さやこだわりがある」「精神的な安定を求めている」などが挙げられます。*)

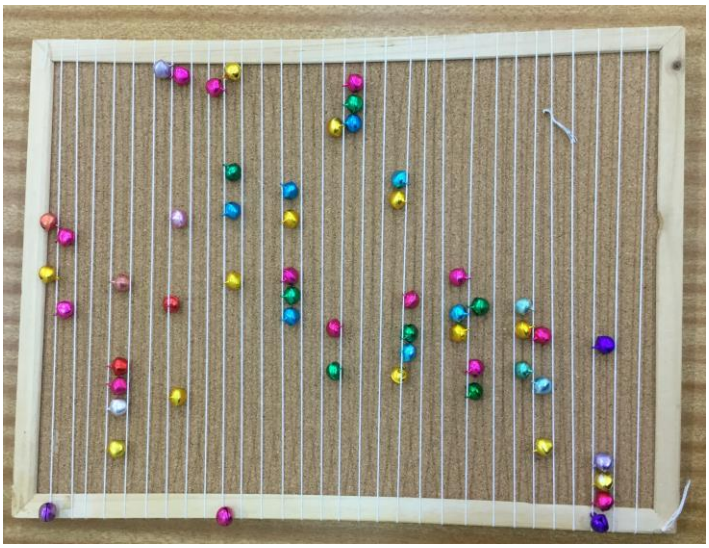
自己刺激が過激になると、自傷行為に発展する可能性があり、また、他者や物への関心が向きにくいという点からも、自己刺激を軽減する指導は重要となります。

触感覚刺激を用いた教材紹介

触感覚刺激（触覚）を用いた教材を紹介します。感覚や認知教材については過去の資料（情報ボックスNo.19,23,26など）でも取り扱っていますので、ご参照ください。100円均一ショップなどで購入できる安価な材料で教材を作ることができます。

様々な感覚刺激の教材を用いた教師との関わりの中で、児童生徒がそれらに気づき、興味を示すことで外界に注意を向けていき、自己刺激を軽減していくことを指導の目的としています。

例１　コルクハープ



コルクボードなどにタコ糸を張って固定します。それを指や手で弾くことで、張力による刺激を受容し、自分の手でハープを触っていくことをねらいます。

また、写真のようにタコ糸に小さい鈴を複数通して設置すると、弾いた時に音が鳴ります。音の刺激を同時に受けることで、外界に注意が向きやすくなると考えられます。

例２　温冷ジェル

　ジェル状の保冷剤を二つ用意し、一つは冷凍庫などで冷やして、もう一つは熱湯に浸して温めます。児童生徒の手や体に触れさせて、どのような反応があるか観察します。好きではない刺激であればすぐに手が離れ、好きな（興味がある）刺激であれば、しばらく触れていると考えられます。
　写真では温かい方を赤いテープ、冷たい方を青いテープで示し、視覚的に温度の違いを一緒に伝えることもねらいとしています。

指導の工夫

　児童生徒が教材に気づき興味を持ちやすくするために、周囲の視覚情報を減らしたり音を遮ったり声掛けを必要最小限に抑えたりするなど周辺環境の整備は重要です。また、感覚に異常がある場合も多く、過敏または鈍麻（＝鈍感であること）の児童生徒に指導するときは、教材の刺激を適切に調整する必要があります。
　それぞれの児童生徒の特性に合った教材選びと関わりを意識していきましょう。

参考）自閉症教育実践ガイドブック（国立特別支援教育総合研究所（著）　　*)一部引用改変